

凋落した台湾外交の挽回

｜ 吳釗燮

台湾をめぐる国際的な大環境は良好ではないが、外交力は国家が生存発展する上で要となる頼み綱である。現在の台湾メディアは、個人的な問題のほか、米政府が米台関係に対し絶えず疑義を呈しているとか、米台、日台、EU台関係が進展していないとか、馬政府が中国に頭を下げているため台湾の国際参与に進展がないといったことにも関心を示している。また、外交部は自分と異なる者を意図的に排除しているため、馬政府によって選挙や政党闘争の道具とされているが、こうした問題は表面的なものに過ぎず、その奥底にある構造的な問題こそが、深く検証し、改善の道を模索すべきところであり、そうしてこそ総体的な外交的立場を改善することができる。

馬政府下において、最も深刻な外交構造上の問題は、台湾に主権があると認めておらず、台湾の主権は中国大陸を含む「中華民国」に属すると考えている点である。外交主権の行使とその伸展について言えば、台湾に主権があると主張しない場合、その結果として台湾の主権が侵害、或いは抑圧されても、台湾政府はこれに対し発言するいかなる立場にもないことになる。例えば、2009年の米中合同声明は台湾の主権を損ねたが、馬政府は口を閉ざし、逆に米台関係は良好であると述べた。政府が台湾の主権は傷つけられるべきでないと対外的に声明を発表できないなら、当然ながらその他の国は台湾に協力する立場にない。

もう一つの重要な構造上の問題は、総体的な戦略方向が誤っている点であり、国家の対外戦略において「兩岸関係を対外関係

より上」に位置づけ、さらには「外交休兵」戦略を採っている。外交部は対米、対日、対EU関係を副次的、二次的なものとし、その他の政府機関が中国との関係発展に努力するのを傍観するか、或いは、台湾が象徴的に国際組織に参加できるように中国が優しい眼差しで見守ってくれるのを期待するしかない。こうした状況下で、外交部ができることは、ノービザ待遇の獲得などレベルの低い問題をめぐって空回りするだけで、その他の対外関係における重要な業務は抑圧されている。

馬政府が戦略上、兩岸を外交よりも上に位置づけているため、馬英九総統就任以降、外交部の誰もが本音を言えなくなり、台湾人が不満や反感を覚えるような中国の外交に対しても、外交部はこれに触れるのを避けたり、重要な点を避けてその場を逃れたりしている。外交部のホームページにおいては、中国からの抑圧に関する情報はすべて削除されており、例えば、フィリピンが台湾人国籍の容疑者を中国に強制送還した事件のように明らかに悪意に満ちた中国の行為についても、外交部は中国については触れていない。また、WHO事務局が加盟国に送付した文書に関して、中国がWHO事務局に迫り台湾を中国台湾省と記載させたが、この件についても外交部は前政府を中傷することで問題を回避した。さらには国交を有する国に対する援助についても、現在、援助額が減少どころか増加しているにも関わらず、「金銭外交」を行っていたとしてまだ前政府を批判している。

外交部関係者は元々、すべての公務員の

中で戦闘力が最も高いはずであるが、馬英九就任後のパフォーマンスは「英明」で、国家安全委員会の指揮がめちやくちなため、外交部は自ら萎縮し、何事についても中央の指示を仰ぎ、何かしたり本音を述べることができず、国民から非難される「官僚政治」に逆戻りしている。外交界の英才は腐食し、第一線の外交官は送迎をしたり、長官に服従することしかできないでいる。

台湾の総体的な外交関係を進展させるためには、外交をめぐる思想や手法を徹底的に変え、台湾の主権独立の立場を確立し、申し立て、何度にも渡って申し立てるべきで、台湾の主権を損なういかなる行為や発言については直ちに反駁すべきである。総体的な国際環境を踏まえ、台湾政府は対外戦略を直ちに改め、何事においても中国を敬うという思考を正すべきである。このほか、外交部もまた偏平化改革を行い、若返りを図り、能力のある第一線の外交官がその力を発揮できるようにすべきだろう。**BT**